

釜石の不撓不屈の精神で

2011年3月17日 国際養殖産業会 会長 北澤 仁

歌の文句じゃないけれど宮古、釜石、気仙沼等の北東北の三陸沿岸は歴史的、経済的、人材的にいっても釜石が中心にならざるを得ないでしょう。今回の被害でも釜石は町は壊滅的ですが新日鉄釜石製鉄所軍団は健在ですし、バックには全国の護送船団の鉄鋼業界が控えています。特に釜石には戦前からの津波被害の経験、戦争末期の2度にわたる米軍の大艦砲撃受難、廃墟からの戦後の日本鉄鋼業復興の先駆け、近年の鉄鋼業リストラクチャーへの挑戦等不撓不屈の精神が生きています。

北東北の工業復興は釜石に任せていいでしょう。ともかく東北はこれからインフラ復興のため今まで冷遇されてきた建設業大振興が必須です。なお直近の船舶着岸はすでに釜石が可能とってますし日米連合艦隊が上陸用舟艇等を使って支援作業をやるでしょう、もう始まるでしょう。



長編小説「つなみ」のさわり紹介

作者 生出泰一(おいでたいいち)

作者略歴 青森県十和田湖町奥瀬出身、花巻在住

この本は明治29年の三陸大津波(M8.6)の被災と復興にまつわる地元の医師鈴木琢治、別名「柴琢」村長の豪快な活躍とその後の悪戦苦闘、不撓不屈の人生をつづったものである。終戦直後の読売新聞社の激烈なストライキを指導し、その後釜石革新市長を務めた鈴木東民氏は「柴琢」の甥にあたる。著者生出氏はすでに亡くなり、著作権は一族の御婦人が引き継いでる模様。

小生昭和60年ごろ釜石在住の頃この「つなみ」を購入し、明治29年の三陸大津波の凄さと今でいえば田中角栄張りのリーダーの救援、復興への行動力に大変興味深く読ませていただき、その後忘れていましたが、今般の東北関東大震災にあたり自室の本棚から多少崩れ、落ちた書籍の一番上にまさにこの「つなみ」が乗っており、これも何かの啓示で100年前の釜石唐丹村の大惨事と大活劇をこの際もつと世に知っ